

# 大学生のスポーツ活動への コミットメントに関する一考察 ～スポーツコースに所属する学生を事例に～

横 井 康 博

## 1. はじめに

スポーツは、人生をより豊かにし、充実したものとするとともに、人間の身体的・精神的な欲求にこたえる世界共通の文化の一つである。またスポーツは、明るく豊かで活力に満ちた社会の形成や個々人の心身の健全な発達に必要な不可欠なものであり、人々が生涯にわたってスポーツに親しむことは、極めて大きな意義を有している。

生涯学習社会を迎え、体育・スポーツの分野でも生涯スポーツという言葉が一般に使用されるようになった。生涯スポーツとは、すべての人々が各自の健康・体力や運動能力の状況、興味・関心、目標、ライフスタイルなどに応じて、自主的、自発的にスポーツを生涯にわたって学習し、生活の中に取り入れて継続していくことである。したがって、人々のスポーツ活動によってライフスタイルが規定されるのかという問題は、生涯スポーツ研究の重要な課題である。

コミットメントという言葉は、第一に結ぶまたは関係させること、第二に委託すること、という2つの意味をもったラテン語に起因する。コミットメントについて、ベッカー(Becker, H.S.)<sup>1</sup>は「人間行動の一貫した方向性を生み出し、またそれ以外の経路をますます犠牲にするところのエネルギーの投入である」と述べ、コミットメントの概念を用いて人間の行動の一貫性また安定した方向性を説明しようとした。またモール(Mol, H.)<sup>2</sup>は、「コミットメントは集団

や思想への情緒的な執着や忠誠を意味する」と述べている。つまりコミットメントはある行動や集団、組織、思想、価値などへの傾倒、執着、結びつき、忠誠などを意味する概念と考えられる。

特にアメリカにおいて、コミットメントの概念を適用したスポーツ参与の研究がシュナイダー (Snyder, E.E.)<sup>3</sup>やカーリー (Curry, T.J.)<sup>4</sup>などによって進められてきている。これらスポーツ・コミットメントの研究は一応の成果もみられるが、まだ始まったばかりである。我が国においても、スポーツ・コミットメントに関する研究は極めて少なく、高峰<sup>9</sup>、金崎<sup>7,8</sup>らの報告があるのみである。

スポーツ・コミットメントは、スポーツへの執着、結びつきあるいはスポーツ行動やスポーツ集団に身を投入することと解釈できる。今回注目したのは、大学生のスポーツ・コミットメントとスポーツ参与に関する状況である。今日、学校でのスポーツ活動が卒業後の継続化あるいは生涯スポーツにつながられているのが問題とされている。生涯スポーツ振興における学校でのスポーツ活動の役割が叫ばれている中、こういった面での実証的研究は少ないのが現状である。

そこで本研究では、個人のスポーツ・コミットメント形成がスポーツ行動の実施あるいは継続化を規定するという立場に立って、現役大学生を対象に、過去と現在のスポーツ参与がスポーツ・コミットメントの形成にどのような影響を及ぼすかということを明かにする。

## II . 研究方法

### (1) 調査の概要

#### ①調査の対象

S 大学スポーツコース所属にする 3,4 年生 35 名を対象に調査を実施した。

これは、いわゆる体育系の学部・学科ではない経営学部・経営学科に所属す

る学生という全国でも例が少ない対象者である。S 大学でスポーツコースがオプションとしてスタートした第 I・II 期生の学生を対象として選んだ。

## ②調査の方法

調査は、担当者が質問項目を事前に用意し、その項目に沿って面接調査によって進めた。

## ③調査内容

①個人的属性、②課外でのスポーツ活動、③ライフスタイル、④現在のスポーツ参与状況、⑤スポーツ意識に関する質問項目から構成されている。

## ④調査時期

平成 19 年 9 月～12 月である。

## (2) 分析方法

今回の調査においては、サンプル数も少なく、また本研究の特性から自由回答からの結果を多く用いるため、数的処理に重きを置かないことを念頭に分析を行った。

## III. 調査結果

### (1) 個人的属性

調査対象者のサンプル数は、35 名である。全員が、スポーツマネジメントコースに所属し、学年は 3・4 年生である。図表 1 に示したように男女比は、大学全体の 1 割強と比較して約 3 割強と比較的高い対象者となった。年

(図表 1) 対象者の性別・年齢

性別	男	27
	女	8
年齢	20 歳	3
	21 歳	15
	22 歳	16
	23 歳	1

齢に関しては、調査時期の回答を反映したため、同学年でありながらばらつきが出た。これは、受験浪人者もばらつきに影響を及ぼしている。また対象者た

ちの場合、正式なコースとして認可されていなかった為、卒業単位に含まれないにもかかわらずコース選択を行ったことから、スポーツ・運動に関して関心が高く、学習意欲が強い学生の集団であった。大学内に設置されている偏差値が高いとされているリハビリテーション学部を第一希望で受験をし、進路変更で経営学部に移った学生が10名であった。その後、学園内に属する専門学校リハビリテーション学院とのダブルスクールを行った学生は4名であった。

対象者の特性として、下宿を伴う県外の学生が山形県、宮城県、富山県、石川県、京都府、滋賀県、沖縄県など存在した。また東海地区では、岐阜県2名、三重県2名、静岡県2名、愛知県21名であった。その中でも岐阜・三重県に関しては、遠方から通う学生もおり、愛知県内でも豊橋市というかなり通学時間を要する対象者が存在した。したがって居住地に関しては、自宅生がほとんどを占めた(26名)。

交通手段に関しては、自家用車を利用している学生が多かった(20名)。これは、愛知県内の対象者に多く、公共交通機関を利用しているほとんどが、遠方からの通学者であった。通学に要する時間に関しては、2時間以上が数名存在し、いずれも公共交通機関利用者であった。この中には大学部活動所属者もおり、平日帰宅時間が深夜に及ぶ者もいる。約1時間半を要して自家用車を利用している通学者も数名おり、所要通学時間というよりも通学地域の移動距離の広さが示された。

入学、コース選択に至る経緯に関しては、「入学前からスポーツマネジメントコースに入るために星城大学を希望した」という対象者が24名であった。そのほとんどの入試形態が推薦入試であることも特徴的であった。選択理由としては、「何らかの形でスポーツに関連する職業に就きたい」「スポーツに関してより専門的な部分を知りたかった」「トレーニング方法など学びたかった」「テーピングやマッサージなどの知識を増やし将来トレーナーになりたい」など将来の選択肢として運動・スポーツ関連を希望している者が多くを占めたが、「経

営学部なのになぜスポーツ

なのか?」「高校の先生に勧められて興味があったから」など全国的にもまだ浸透していなかったコースにとりあえず身を置くという考えを持った対象者も存在した。また、一般入学試験受験者に多かったのが、リハビリテーション学部を希望したが経営学部に進路変更した際に「健康というキーワードからスポーツ・運動について勉強したかった」「将来、理学療法士になってスポーツの現場で働きたい」といった理由からスポーツのコースを選択したということだった。

大学のスポーツクラブ活動を行っているものは、27名であった。「所属なし」

(図表 2) 対象者の特性

出身地 (出身高校)	東北地区	2
	北陸地区	2
	東海地区	28
	関西地区	2
	九州地区	1
大学入試形態	一般入試	11
	推薦入試	18
	内部推薦	6
居住形態	自宅	26
	下宿	9
通学手段	公共交通機関	10
	自家用車	20
	その他	5
通学所要時間	30 分以内	9
	1 時間未満	17
	1 時間以上	9
所属クラブ	硬式野球部	9
	サッカー部	4
	バレーボール部	6
	ハンドボール部	3
	女子バスケットボール部	4
	陸上部	1
	ラグビー部	1
所属なし	7	

の対象者に関しても地元のスポーツクラブチームに在籍し、平日・休日問わず定期的に練習や試合などの活動を行っているとのことだった。以上をまとめて図表 2 に示す。

## (2) 課外活動・クラブ活動の所属歴

### ①学校期における所属形態

対象者全員が、小学校・中学校・高等学校という学校期全てにおいて、スポーツ活動のクラブに所属していた。高校時代には、全ての対象者が高校の運動部活動に所属していたが、小・中学校では数名の者が学校での活動を行ってなかった。これは、学校の部活動のみ所属、学校の部活動と地域のスポーツクラブ両方に所属、地域のスポーツクラブのみ所属という3つの所属形態が存在した結果である。また、学校の部活動と地域のスポーツクラブが連携して活動を行っているスポーツクラブに所属している者もみられた。

(図表 3) 過去の学校期の所属スポーツクラブ (n=35)

	部活動	地域のスポーツクラブ
小学校時代	33	15
中学校時代	33	17
高校時代	35	3

### ②所属スポーツクラブの活動内容

活動内容についてみると、学年が上がっていくほどスポーツ活動における種目が単一化されている。複数種目のスポーツ活動においても、学校の部活動内での複数種目スポーツ活動者もいれば、部活動と地域のスポーツクラブとの活動種目の違いを示している者も存在した。

小学校期においては、3種目以上のスポーツ活動を行っていた者が多く、シーズンによって活動種目を変えるといった傾向にあった。また、同一種目で学校部活動と地域のスポーツクラブを兼任しているということも目立った点である。中学校期では、学校部活動よりスポーツクラブに重点を置き、学校部活動では種目を変えるといった回答が多く得られた。高校期においては、ほぼ単一種目であり、学校部活動中心のスポーツ活動になっていることが明らかになった(図表4)。

活動種目をみてみると、硬式野球、軟式野球、ソフトボール、サッカー、バスケットボール、バレーボール、ソフトテニス、バドミントン、陸上競技、水泳、スキー、ラグビー、アメリカンフットボールなどであった。複数種目対象となっていたのは、主に硬式・軟式野球、陸上競技、水泳であった。

### ③スポーツ実施頻度と実施時間

活動頻度においても、学年が上がるにつれて高くなっている。学校部活動と地域のスポーツクラブを掛け持っている活動者は、当然頻度が高くなり、地域のスポーツクラブのみの活動者は低くなる。さらに、平日と休日とではスポーツ活動の内容がはっきりとした違いを見せることから、休日でのスポーツ活動についても調べた。図表5にも示したように、全体的には学年が上がるにつれて頻度は高くなっていく。しかし、スポーツ種目の専門性が高くなるため、指導者確保の問題や受験による学業との両立などの原因で、「頻度は高いが休日利用が少ない」という傾向を見せた。さらに「実施頻度の高さや活動内容の充実度が伴わない」などの問題も面接調査において意見として出された。

(図表 4) 過去の学校期における活動種目数 (n=35)

活動種目数	1 種目	2 種目	3 種目以上
小学校時代	16	15	4
中学校時代	23	11	1
高校時代	32	3	0

(図表 5) 過去の学校期におけるスポーツ活動実施頻度 (n=35)

	週 5 日以上	週 3 ～ 4 日	週 1 ～ 2 日	月 1 回程度
小学校時代	21	10	3	1
中学校時代	30	3	2	0
高校時代	31	3	1	0

活動内容のひとつの指標として、スポーツ活動に要する実施時間について調べた。図表 6 に示したように、学年が上がるにつれ活動時間数は増加している。しかし一日の平均時間数は、時間数増加に比べて上がっているとは言えないことが明らかになった。小・中学校時代は、地域スポーツクラブでの活動において休日にほぼ一日中活動することに対して、高校時代に部活動において休日の時間数が午前または午後のみと、ほぼ一日中との二極化を示した。また種目の専門性が高くなることによって、種目特性による練習形態の差が活動時間数に変化を及ぼしていると考えられる。

(図表 6) スポーツ実施時間数 (n=35)

	週 15 時間以上	週 10 ～ 15 時間	週 10 時間未満	週 1 時間程度
小学校時代	25	7	2	1
中学校時代	29	3	3	0
高校時代	30	3	2	0

### (3) 現在のスポーツ参与状況

#### ①現在のスポーツ実施内容

現在の実施状況をみると、大学のスポーツクラブ所属の有無が実施頻度に影響を及ぼしているとは言い切れないことが明らかになった (図表 7)。大学のスポーツクラブに所属していない対象者に聞いてみると、「フィットネスクラブに定期的に通って体を鍛えている」「休日のゲームに出場するために日頃から練習している」「地域のスポーツクラブのお手伝いと自身のスポーツ参加を兼ねている」など集団や組織としてスポーツ活動を行うというよりは、大学生活とのタイミングによってそれぞれのスポーツ活動時間確保に向けて動いている事が明らかにされた (図表 8)。また、部活動に所属していても実施頻度や実施時間数が高いとはいえ、現在のスポーツ実施状況やスポーツ参与が大学クラブ活動所属の有無に影響されていないことが明かになった。

(図表 7) 部活動所属有無による実施頻度 (n=35)

	週 5 日以上	週 3 ～ 4 日	週 1 日程度	月 1 日程度
所属あり	12 (25)	15 (3)	1 (0)	0
所属なし	2 (5)	3 (2)	2 (0)	0

( )内は授業を含んだ場合

(図表 8) 部活動所属の有無による実施時間数 (n=35)

	週 15 時間以上	週 10 ～ 14 時間	週 10 時間未満	週 1 時間程度
所属あり	12 (17)	8 (8)	8 (3)	0
所属なし	1 (4)	4 (3)	2 (0)	0

( )内は授業を含んだ場合

図表 7,8 で示されているコース授業内の実技・演習系におけるスポーツ実施を含めると、頻度も時間数も増加する。このように対象者全員が、日常の中にかなり高い比率でスポーツをとり込んでいることが示された。

## ②指導者としてのスポーツ参与の程度

部活動所属なしの対象者の中には、「外部指導者として地域の小・中学校で指導を行っている」「スイミングスクールでインストラクターのアルバイトを行っている」「地域の少年野球のコーチをしている」「簡単なサッカースクールのコーチをしている」など、指導者としてスポーツ参与している対象者が数多くみられた。これらの者たちは、自身のスポーツ実施頻度や実施時間数とは分けており、スポーツ参与という観点からみると(3)①での結果を大きく上回り、生活のほとんどの時間を費やしていることが明らかになった。また部活動に所属している者でも、平日は選手として活動し、休日に地域でスポーツクラブの指導を行っている者も存在した。

現在のスポーツ参与状況は、自身の純粋なスポーツ実施とスポーツコースにおけるスポーツ活動量、指導者としてのスポーツ参与等を含めると、ほとんど

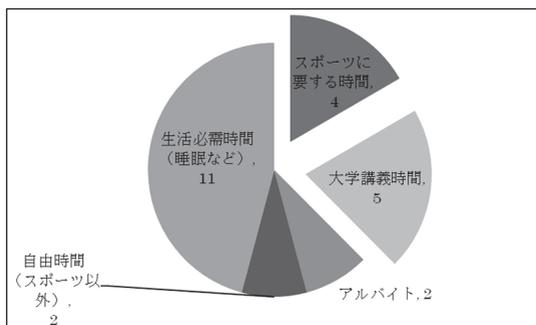
の対象者が生活のほとんどの時間をスポーツに関して日々を過ごしていることが明らかになった。

#### (4) ライフスタイルにおけるスポーツへのコミットメント

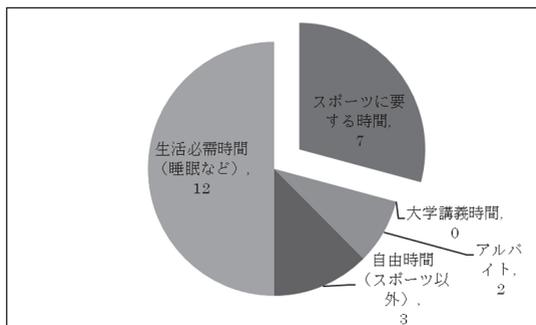
平日における生活パターンからのスポーツ・コミットメントをみてみると、起床時間にはばらつきがあり、大学講義パターンも大きなばらつきがあった。その為、部活動所属対象者の動向も講義の空き時間に練習を行う者や講義終了後の夕方から開始するといったスポーツ活動があった。しかしほとんどの所属者が講義終了後に行っており、活動終了後にアルバイトへ直行し、帰宅して自由時間後に就寝というパターンの所属者が多かった。部活動に所属していない者も日によって多少変化があるものの、自身のスポーツ活動後にアルバイト、帰宅という同じようなスタイルをとっていた。また時間数からみたスポーツ・コミットメントにおいては、睡眠時間の平均約6時間、食事・風呂などの生活必需時間を合わせると約11時間であった。さらにアルバイト平均所要時間約2時間、3・4年生時の調査ということで、通学に要する時間平均1時間とし、学校滞在時間は様々ではあったが平均して5時間であった。この平均時間5時間の中にもスポーツ活動時間が含まれていることを考えると、スポーツに参加する時間数の平均約4時間を合わせ、一日の生活時間における選択可能な時間数の1/4以上をスポーツ活動に費やしコミットしていることが明らかになった(図表9)。

休日においては、ほぼ一日スポーツ活動に充てる者と(図表10)、アルバイトを重視する者(図表11)というスポーツ・コミットメントの観点からすると二極化の行動がとられていることが明らかになった。ほぼ一日中スポーツ活動を行っている者のスタイルは、午前の早い段階からスポーツ参加を行い、活動終了後もそういった仲間と行動を共にする傾向がみられた。一方アルバイトを重視する者は、勤務疲労からスポーツ活動には消極的な行動をとる者が多く、

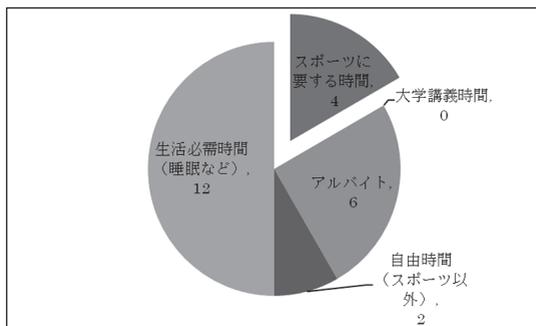
(図表 9) 平日ライフスタイルの時間数 (平均値)



(図表 10) スポーツ重視の休日ライフスタイルの時間数 (平均値)



(図表 11) アルバイト重視の休日ライフスタイルの時間数 (平均値)



行っても軽度の活動にとどめていることがわかった。また時間数からみてみると、睡眠時間を平均7時間、生活必須時間を5時間として約12時間と設定できる。図表10のようにスポーツ活動重視の者は、平日に比べスポーツに平均7時間という多くの時間を要し、一日の1/4以上の時間をスポーツ活動に費やしコミットしていることが明らかになった。

平日、休日ともに時間数に誤差はあるが、ライフスタイルにおけるスポーツ・コミットメントという観点からみると、かなり高い割合でスポーツがコミットしていることが示唆された。

## (5) スポーツに関する意識

### ①運動・スポーツの重要性に関する認識

運動・スポーツに関する重要性については、全員からかなり高い意識の意見が出された。「スポーツを行ってきたおかげで今の自分がある」「スポーツを通じて人間形成ができた」「挨拶や言葉づかいについて学ぶことができた」など社会生活に重要な事柄を運動・スポーツを行うことによって身につけたと感じる者が多くみられた。

さらに、「幼いころから運動をすることによって体が頑丈になった」「ぜんそくなどの持病もちであったが、水泳で克服できた」「持久的な要素など体力に自信が持てるようになった」など健康や体力の保持・増進に関するプラスの意見も多く出された。また、「技術の向上に至る創意工夫が、その後物事に取り組むにあたって大きな成果があったように思える」「技術力が高まってくると、次々に欲求も高まってきてスポーツへの関心が強くなり普段の生活に充実感が増していったように思った」「トップレベルの技を観戦することによって職業として選択肢に入った」など技術の向上とともにそれぞれのスポーツ種目への関心が高まり、その後の継続やコミットメントに影響を与えたことが調査から明らかにされた。

仲間づくりに大きな役割を果たすことも多くの対象者からの意見として出された。「チームスポーツだったので、おのずと日頃付き合いの無い子ともすぐに仲良くなれた」「高校の時は様々な地域から集まってきていたが、スポーツのおかげですぐに溶け込めた」「普段は付き合いはないが、スポーツの時には分かり合える」「地域でスポーツ教室を手伝ったとき普段は交流の全くないお年寄りとも仲良くなって、その後も付き合いが継続した」など運動・スポーツの持つ大きな役割について、肯定的な意見が多かった。また、楽しさの追求についても意見が多く出された。スポーツの持つ‘面白み’というものが、楽しさと生活への充実感とに繋がることを主張する意見も数多く出された。普段の学生生活における勉強での行き詰まり、会社におけるストレス、高齢者の孤独感など社会生活におけるマイナス要素を払拭するため、楽しさの追求をスポーツが請け負える可能性が高いのではないか、という問題提起もされた。

## ②運動・スポーツへの今後の継続化

在学中から卒業までのスポーツの継続に関しては、「就職先の研修が始まるまでは今のペースを保ちたい」「就職活動の時には関わる度合いが少なくなると思うが継続するつもり」「部活動は4年生まで継続して、その後も地元で小学生のコーチをする」「体が続く限り選手としてスポーツを楽しみたい」「学生一杯まで選手として行い、卒業後は指導者としてスポーツ継続を希望している」などほぼ全員が、運動・スポーツ活動の継続を示した。

卒業後の運動・スポーツに関する将来展望としては、「体が続く限り運動・スポーツ活動に携わりたい」と意見が一致した。さらに継続の具体的な案としては、「現在の地元での活動を今後も継続していこうと思っている」「地域のスポーツクラブ活動の継続と指導者としての活動を新たな場所で始めたい」「今まで学校での部活動しか経験が無いが、どこかの所属先を探して活動したい」「今まで経験のないスポーツ種目に挑戦したい」「生涯スポーツとして永く継続できる新たな取り組みを行いたい」など運動・スポーツ活動の継続化に向

けて積極的な意見が多かった。

### ③今後の運動・スポーツへの関わり方

就職の選択にあたって、スポーツに関わる事に携わりたいと希望している者が1/3近くを占めた。「スポーツメーカーに勤め現場に出向きたい」「スポーツ指導者を派遣する起業を興したい」「指導者として生計を立てたい」「子供たちにスポーツの良さを伝える職業に就きたい」「理学療法士になってスポーツトレーナーになりたい」「スポーツイベントを企画・運営する企業に勤めたい」など、漠然とスポーツ関連に憧れを抱いているわけではなく、職種に関するより具体的な希望を持っている傾向にあることが明らかになった。また、今まで選手のみを経験している者たちに多くみられたことではあるが、指導者への模索を始めている割合が高かった。さらに、直接運動・スポーツに関わる企業ではないにしろ、一般企業における地域貢献の一環としてのスポーツイベント開催に携わりたいと考えているという意見も出された。しかし、就職の選択肢の中にスポーツへの関わりを示していない者もいた。これは、関わりたくないという否定的な意見ではなく、「職業として運動・スポーツ関連を選べない」「自分に合う運動・スポーツ関連の職種が見当たらない」など、スポーツには関わっていきたいが、職業として関わることには抵抗があるという意見であった。

以上のことから対象者の多くは、どんな形でも深く・永く運動・スポーツに関わっていく希望を持っていることが明らかになった。

## IV. 考察

本研究においては、スポーツにコミットしていればいるほど、その個人はスポーツとの関わりが深いという立場に立っている。そこで以下において、スポーツ・コミットメントとの関連について考察を行っていく。

### (1) スポーツ実施程度との関連

今回の調査結果から、対象者の現在の実施状況の特徴をみても、他者からの影響や組織に属することによって実施内容や実施頻度、実施時間などが変化するという傾向を見せなかった(図表7,8)。これは、対象者それぞれがスポーツに対してのスタイルを確立させていると考えられ、スポーツへの結びつきが強いことの一つの証明であると考えられる。過去におけるスポーツ実施や実施頻度なども小・中・高において9割の人たちが定期的にスポーツ参加していることが明らかになった(図表5,6)。これも内容的には様々な傾向をみせていたが、自分自身の中にスポーツというものがはっきりとコミットメントされていることが示されたといえるのではないだろうか。過去から現在に至るまでのスポーツ活動の動向をみても、現在のスポーツ定期実施者は、過去のスポーツ種目においても複数実施している者が多く、また単一種目であっても部活動以外の地域でのスポーツ実施を行っているという傾向を示している(図表4)。さらに現在の実施程度の結果から、スポーツ実施、スポーツコースにおけるスポーツ活動量、指導者としてのスポーツ参加などを含めて生活のほとんどの時間をスポーツに参加させているということを図表9,10で示したことから、スポーツ実施程度がスポーツ・コミットメントに影響を及ぼしていると言える。

### (2) スポーツクラブ所属との関連

過去のスポーツクラブ所属は、その後のスポーツクラブ所属継続に大きな影響を及ぼしていることが明らかになった(図表3,7)。それは、クラブ活動が対象者のライフスタイルにおいて大きな役割を担っていることが要因の一つである。さらにスポーツ活動を継続するには、クラブ所属によってもたらされるスポーツ環境が重要な要素として挙げられる。このことからクラブに所属しないということは、現在のスポーツ活動量が保たれないのではないかと危惧す

るほどの大きな存在であることがわかった。そのため学校でのクラブ活動を過去から現在まで継続した者は、今後のスポーツ活動の継続は希望しているものの、新たなスポーツ参与の場所や機会を増やすということに関して不安を抱いている者が多くを占めていることがわかった。

スポーツクラブ所属が、スポーツ実施の決定的要因になるわけではないが、スポーツにコミットするという観点からは、過去から現在に至るスポーツクラブ所属は必要不可欠であることが明らかになった。

### (3) スポーツ実施パターンとの関連

本調査において、ライフスタイルにおけるスポーツへのコミットの高さが示された。これは過去からのライフスタイルの中で、スポーツに要する時間を失った場合、その時間を埋めるのが困難であると判断していることも一要因として挙げられるのではないだろうか。また、アルバイトや行動範囲の拡大に伴ってスポーツ以外の活動も選択肢としてあるにも関わらず、生活の一部として必ずスポーツ参与しているのは、スポーツ活動によって今の自分の生活スタイルが成り立っていると考えているからである。さらに現在においても、他の学生に比べて、学生生活の中により多くの時間や頻度でスポーツに参加していることもスポーツへのコミットを助長している要因になっている。

### (4) スポーツの継続意志との関連

スポーツに関する重要性に関しては、全員から感じ取られた。またスポーツの継続化に関しても積極的な傾向を示した。さらにスポーツへの将来の関わり方に関しても、形に拘ることなく末永くつき合っていくという意思表示が強く出された。このことから、今までのスポーツ活動の経験による爽快感、達成感、連帯感などの精神的充足がプラス方向に多大な影響を及ぼしているものと推察

される。また、受験や入学・卒業のスポーツ活動減少時期などに体験した充実感の不足や喪失感が、スポーツへの関わり方の強さや継続化への大きな要因になっていると考えられる。

こういったことから、スポーツ実施パターンが確立され、スポーツへの関わり方の強さや継続への意欲の高さ、スポーツの重要性を高く評価しているということは、スポーツにコミットしている可能性が高いことを示唆していると言える。

## V おわりに

本研究は、スポーツコース所属の学生を対象として過去から現在に至るスポーツ参与の方法が、スポーツ・コミットメント形成にどのような影響を及ぼすかを明らかにする目的で行った。そこでは、スポーツ実施パターンが確立されていること、大学卒業後のスポーツ継続化に意欲が高く、さらにスポーツの重要性を高く評価しているほどスポーツにコミットしていることが明確になった。

スポーツ実施パターンが確立されているとは、過去から現在に至るまで多少のスポーツ活動形態の変化はあるにせよ、生活の一部としてスポーツが位置づけられているということである。また、スポーツ参与が滞ることからのライフスタイルにおける喪失感の大きさからもスポーツにコミットしていることが明らかであり、過去から現在までスポーツに対する依存度の高さが窺えた。

スポーツ継続化に関しては、活動形態として様々な関わり方があるものの、ライフステージによって変化させていくという長期的なスポーツ参与の考え方の強さが明らかになった。

スポーツの重要性を高く評価しているのは、スポーツを通じて得られたものの大きさや現在の自己形成に大きく寄与しているという認識の高さと考えられる。さらに今後のスポーツ活動によって得られるであろうライフスタイル確立

における充実度の高さへの期待感が、よりスポーツへのコミットを促していると考えられる。

こういったことからスポーツ・コミットメントの形成においては、過去から現在に至る対象者の運動・スポーツへの関わり方や経験がプラス方向にはたらし、継続にあたってのプランが明確なほど構築されやすいことが本研究において明らかにされた。

しかし本調査においては、サンプル数が少なく面接調査による聞き取りの自由回答を主に用いて行ったため、数的処理の部分が手薄になった。今後は、スポーツコースに所属する学生に限定せず、一般学生にも試みる必要もある。また卒業生の追跡調査など、社会人に対するスポーツへのコミットメントについて調査を行うといった調査対象者の拡大を図っていく予定である。

今回の事例研究結果をもとに、スポーツ・コミットメントを測定するための尺度を改善しつつ、各世代の状況把握に努めながら、継続して研究を行っていく。最終的には、国民全体のライフスタイルにおけるスポーツへのコミットメントレベルとの関連を分析する研究へと発展させていきたい。

## 参考文献

- (1) Becker, H.S. [1960] NOTE ON CONCEPT OF COMMITMENT, American Journal of Sociology, 66.
- (2) Mol, H. [1983] Meaning and Place: An Introduction to the Social Scientific Study of Religion, The Pilgrim Press, New York.
- (3) Snyder, E.E. [1983] Identity, Commitment and Type of Sport Roles, Quest, 35.
- (4) Curry, T.J. and Weaner, J.S. [1987] Sport Identity Saliency, Commitment and the Involvement of Self in Role: Measurement Issues, Sociology of Sport Journal, 4.
- (5) Stevenson, C.L. [1990] The Early Careers of International Athletes, Sociology of

- Sport Journal, 7.
- (6) Corbin, C.B., Nielsen, A.B. and Borsdorf, L.L. [1987] Commitment to Physical Activity, Journal of Psychology, 18.
  - (7) 金崎良三 [1998]「社会人のスポーツ・コミットメントの形成に及ぼす学校体育の影響」  
平成8・9年度 研究成果報告書
  - (8) 金崎良三 [1992]「スポーツ・コミットメント形成とスポーツ参加に関する研究」  
ースポーツにおける友人関係によるコミットメント尺度作成の試みー」健康科学  
第14巻
  - (9) 金崎良三 [1995]「青少年のスポーツ・コミットメントの形成とスポーツ行動の継続  
化に関する研究」体育学研究 第39巻
  - (10) 高峰修・守能信次 [1997]「ウォーキング・コミットメント尺度の作成と検討ーラン  
ニング・コミットメント尺度を適用してー」中京大学体育学論叢 38-2
  - (11) 飯田浩之 [1999]「特色ある学科・コース調査分析」平成10年度 文部省『高校教  
育多様化実践研究』報告書
  - (12) 荒井貞光・迫俊道 [1998]「大学時代のクラブ・サークル経験に関する一考察ー社会  
人のアンケート調査からー」広島経済大学研究論叢 第21巻 2-3号
  - (13) 東川安雄・荒井貞光・服部宏治 [2000]「ジュニア選手育成・強化のための環境整備  
に関する調査研究」広島スポーツ科学研究 第10巻
  - (14) 「スポーツ振興基本計画」[2006] 文部科学省